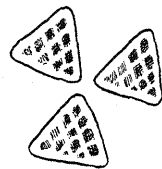


人間の驚くべき能力について



小川 了

警女^{こせ}おりんが脱走兵岩淵平太郎に出会ったのは大正七年（一九一八年）四月二十一日の夕刻、東川（新潟県内）の阿弥陀堂のことであった。警女とは「ひと口にいつて、盲目の女旅芸人のこと」である。警女は普通、数人で仲間を作り一定の住居に集団で生活をし、時期を決めて旅に出るのであるが、おりんは「はなれ」である。警女の集団には驚くべき厳しい掟があり、生涯独身であることが要求され

ると言う。しかし、旅の途次で男と出会うのはいうまでもなく、また「年まわりがきて、性の目ざめがあれば、自然と男を恋うる心が出てくる」のも当然であり、そうして男と交わったことが仲間には知られ「落とされる」、つまり仲間から外され、はなれ警女として以降、一人で放浪、門付けをすることになる。

大正七年、つまりシベリア出兵がおこなわれてい

るさなか、米騒動も起き、物情騒然としていた。そのような時期において、兵営脱走は死罪に匹敵する重罪であった。おりんが阿弥陀堂に来たのはもちろんそこで一夜を過ごすためであるが、そこに平太郎がいたというわけである。平太郎は「瞽女さんや。おまんも、喰わねか」といって、にぎりめしを差し出している。平太郎はしかし、おりんの身体には決して触れようとしなかった。二人はその後、兄と妹ということにし、平太郎がもつ下駄作りの技を頼りに各地を渡ってゆくのである。

まことにもの悲しい結末を迎えることになるこの物語そのものは、若狭にのこる恵林地蔵にまつわる言い伝えをもとに、水上勉が「在所もあかさずに死んだ盲女への鎮魂歌」として創作したということになっている。ただ、読者としていえば、この物語には全くの創作とはいえない、多くの真実が含まれていることは疑い得ない。文学のもつ虚構性が人生の

真実そのものを語るといつてしまえばそれまでであるが、読者はこの物語の中に深く人の胸を打つ多くの真実を見いだすであろう。この物語はまた、篠田正浩監督により同名の映画になっている。こちらも忘れたい名画である。

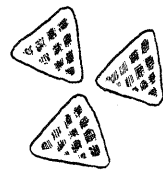
創作上のおりんさんが平太郎に出会った時、実際に瞽女として生涯を送った小林ハルさんは十七歳か十八歳の頃である。越前のかなり裕福な農家に末っ子として生まれたハルさんは生後百日ほどでそこひ（白内障）になり、視力を失った。明治の時代である。五歳で瞽女にもらわれるまで「寝間におかれ」そこで三度のご飯を食べていた。「ハルと呼ばれなかつたら声を出すんでないよ」といわれ、一人でじつと寝間にいる自分を「本当にいい子だ」とハルさんは思っていたという。「お祭りの太鼓が聞こえても、子どもの遊ぶ声がしても、私は遊ぶことを知らなかつたから、別に行ってみたくとも思わな

かったし、目が見えないから、家の人は誰もよそへ連れていってくれなかった」と語っておられる。

水上勉によると、この時代「もつとも賤しいとされる盲目芸人」といわれた瞽女さんになるための修行がいかに厳しいものであるか、生きるか死ぬかの境目を、ののしられ、棒で打たれながら文字通り手探りで這っていく容赦のないものであることを、わたしたちは小林ハルさんの語りによって知ることになる。第一、瞽女さんの修行はタダではないのである。「二十一年の年季で弟子入りし、その間の食いぶちやけいこ代は家で出すことにして、もし、私の方で勤まらなければ（親方に）縁切り金を出す」という契約がなされている。瞽女の修行に出ることが決まるとすぐに（五歳の四月）、針みず（針孔）への糸通しから訓練が始まっている。初めは畳とじ針、次に寝具とじ針、その次は長みず、そして丸みずとだんだん細くなる。「おら、絹の着物なんか着

ないから、こんな細い針に糸を通すのなんかいやだ」といって泣いたことがあったという。三味線や唄を教わるのは七つになつてからである。

ハルさんが「口には出さなかったが、本当にいやだった」という寒声（かんごえ）（寒中、外に出て大声で唄の練習をすること）のすさまじさには読者も身を切られるだろう。冬のさなか、「朝は五時から七時まで、夜は六時から十一時まで一日二回、休みなしでうたう」のである。七歳のハルさんは「四時半頃になると必ず目をさまして自分で支度をして出た。もし起こされたりすると朝飯抜きにされたから、一日も寝忘れてりするとはなかった。着物はさらしの下着一枚、そして赤い木綿の腰巻きをつけて、その上ネルの単衣を着てかっぱを着る。頭には帽子をかぶり、素足にワラジをはいて、雪の中で杖につかまっ



て唄をうたった」というのである。

それにしてもハルさんの記憶の確かさには舌を巻かずにはおれない。艱難と辛苦に満ちた一生が実に細かく再現されていることには驚くほかない。ここでは、一読者としての筆者にとってやや本筋から離れたことではあるが、驚いたことがあり、そのことを記しておきたい。ハルさんが十三歳の折りのことである。ある村に泊まったとき、年頃になったハルさんをあてにして、村の若者達が「這い」に来るかも知れないと家のお父さんが言う。そして、たとえ夜這いに来ても注意すると後で、「田んぼに入つて稲を引っこぬいたり、畑の作物を荒らしたり」するので放っておくが許してくれと言う。実際、その夜、青年達が這いに来て、「どうしても用事をたせ」とせまる。ハルさんは「おらは殺されたつて用事はたさない」と断る。一時間以上も押し問答をした末、青年達はあきらめて帰っていったのである。

る。村の荒くれ達の夜這いにも、同意がなければ強制はしないというきちんとしたルールがあったことが分かる。

最後に、もう一つ、『渡辺莊の宇宙人』という快著に触れておきたい。これは福島智さんという全盲、全聾の青年がみずからの生い立ち、現在の日々の生活を記したものであるが、想像するにあまりある困難と苦勞の生活を驚くほどの明るい筆致で描いておられる。福島さんのご両親、そして福島さんの妻になられた女性のご努力にも敬服する。福島さんは今年四月から東京大学先端科学研究所の助教授を務めておられる。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

☆水上 勉『はなれ瞽女おりん』新潮文庫

☆桐生清次『最後の瞽女 小林ハルの人生』文芸

社、二〇〇〇年十一月刊(本書は『次の世は虫に

なっても』というタイトルで柏樹社から一九八一年に出版されている)

☆福島 智『渡辺荘の宇宙人』、素朴社、一九九五
年刊

私たちの未来を探し求めて

小林 瑠以

私が紹介するのは、『今、赤ちゃんが危ない―母子密着育児の崩壊』(田口恒夫、自費出版、二〇〇〇年)(注)と『子どもの心と言葉を育てる本』(田口恒夫、リヨン社、発売・二見書房、二〇〇〇年)の二冊である。

前者は田口自身によって書かれたもので、後者は、木山憲世が三年間田口のもとに通って田口が話したものをまとめたものであるが、それぞれに別の良さがあるから両方読むことをお勧めしたい。

田口恒夫(一九二四〜)は、日本における言語障